柏木誠治の生活



清水義範

岩波書店

需要全本请访问 www.ertongbook.com

木誠治の生活

清水義範



岩波書店

柏木誠治の生活

一九九一年一二月二日　第一刷発行©

定価一四五〇円
（本体一四〇八円）

著者　清水義範

発行者　安江良介

〒101-02　東京都千代田区一ツ橋二-三-五
発行所　株式会社　岩波書店
電話　〇三-三二六五-四一一一（案内）

印刷・凸版印刷　製本・松岳社

Printed in Japan
ISBN4-00-002801-4

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

第一章 普通の一日 1
第二章 休日 49
第三章 日日の課題 95

需要全本请访问 www.ertongbook.com

第四章 身辺些事 141
第五章 同居人たち 189
第六章 普通の人生 235

第一章　普通の一日

1

柏木誠治はその朝、随分久しぶりに艶夢を見た。目が覚めて、まだそんなことがあるのかと驚いたくらいである。

蒲団の中で夢を反芻してみた。

初めのうちは、道に迷っている夢である。兄の彰一が先に行って待ってることになっている展望台へ、彼は早く行かなければならない。遅れれば遅れただけ、彰一から小言をくらいそうだ。夢の中で彼は大人だったが、兄に対する気持ちのところだけは子供の頃のそれになっていた。間の悪い奴だなあと、彰一にまた言われるに違いないと考え、彼は焦っていた。

ところが、行けども行けども展望台が見えてこない。心当たりの方向に進んでいるのだが、よその家の裏口にぶつかったりして、さっぱり要領を得ない。

そのうち、ふと考えた。展望台というのは高いところにあるに違いない。なのに、自分が辿る道は平坦である。これでは行きつけるはずがない。

どこか階段を登るはずだと思い、それを捜したがなかった。かえって、中学校の校舎の中に入ってしまった。

そこに、佐橋三也子がいた。この子の親は学校の用務員をしているんだった、と彼は思い、彼女がそこにいることを納得した。

三也子は、待ってたのよ、というようなことを、かなり慣れ慣れしい態度で言った。兄妹のような打ちとけた態度であった。

もう、展望台も、兄のこともどうでもよくなった。その件は終った。

やっぱりぼくがいなきゃ駄目かね、というようなことを、彼は言ったか、態度で伝えるかした。夢の中のコミュニケーションは、言葉というものの比重が小さくなる。半分は以心伝心のようなことで気持ちを伝えあう。

三也子が全面的に心を預けてくることは非常に快いことであった。そうなんだよな、と理由のないままに甘美な納得をした。

三也子はゆかた姿で彼の腕にぶら下がるようにしなだれかかってきた。三也子がゆかたを着ているということがこの時認識された。

「あなたなしでは生きていけないの」

と三也子は言った。全面的に依存する口調であった。申し分のない気分であった。

二人の間の年齢差はかなり接近していた。彼が若くなっているのである。

色欲というよりは、これをしても苦情はないはずだという、認可された喜びを確かめるために彼は、ゆかたの襟元から手を入れて三也子の乳房を摑んだ。事態を受け入れたまま、彼女は上体の力を抜いて崩れ落ちた。

その場所は、もう中学校ではなくなっており、畳の敷かれた部屋だった。

誰がいつ襖を開けて入ってくるかもしれないのが気になるな、と思いながら彼は三也子のゆかたをはぐって、秘所に手をのばした。そこは熱い湯をたたえたようになっていた。

三也子はあらがわず、むしろ協力した。

彼は肉欲よりもむしろ、二人の意志がひとつに一致して事態を流れさせていることに、精神面の感激を得ていた。三也子は自分から手を彼の股間にのばして、一物をズボンの上から握りしめた。

彼は、ズボンと下着を脱ぎ、それを解放した。そして、こう思った。

うまくいくといいが。

最後までうまく、元気に、逞しく……。

そんなことを思うというのが馬鹿げているよな、という反省が起こり、それが彼を目

需要全本请访问 www.ertongbook.co

覚めさせたのだ。

目覚めて、まだこんな夢を見るかと驚いた。

彼は体が融けるようないい気分で蒲団の中にじっとしていた。

青年の頃と違って、粗相はしていない。それどころか、股間のものはでろりと、あくびをするような状態でいる。

しかし、夢の中の甘美な気持ちは続いていた。女性と、あんなにも許しあった気分になれたというのが、青年の頃の恋の喜びに似て彼の脳髄をしびれさせた。体の細胞がシュワと発泡しているように感じた。

それから、あらためて相手が佐橋三也子であったことを思った。

すると、どうして彼女が、という不思議な気分が発生した。彼女がどうのこうのと、考えたことは一度もないのに。

三也子は会社で、一応彼の下にいるＯＬである。今年の春入社した、まだ子供のように若い子だ。もちろん学校の用務員の娘だというような事実はない。その子に特に好感を抱くということもなかったのに、なぜこんな夢を見たのか。

頭の中に現実の三也子のことが思い出された。現実は、それほど華やかなものではない。いつも何か不服そうな顔をしている気のきかない若い娘が浮かびあがってくる。

しかし彼はまだ半分、夢のもたらす甘美さを引きずっていて、愛すべき宝物を見つけ

たような満足にもひたっている。

そのうち、現実が夢を押しのけた。

馬鹿らしい、と彼は思い、蒲団をはねのけて起きあがった。口の中が煙草臭い。パジャマ姿で蒲団を畳んで押入れに片づけていると、襖が開いて正代が顔を出した。

「あっ、起きたの。朝ごはんできてるわ」

う、と彼は一音で返事をした。

ズボンとワイシャツに着替えて、柏木誠治は洗面所へ行った。行ってみると、隣の風呂場の中でシャワーを使っている音がしていた。覗かなくても、すりガラス越しに、黄色いパジャマ姿の志織が、洗い場にうずくまって頭を洗っているのを見分けることができる。

またか、と彼は少し苦々しい気分に襲われた。

娘が朝シャンに夢中になるということが、彼にはどうも気にいらなかった。朝シャンという言葉も好きではない。なんという粗雑なセンスの言葉だろうと思う。色気づき始めた娘が毎朝必死で頭を洗うというのは、なんだか毎朝少しずつ犯されていくような感じがするのだ。

「髪の毛はお前、そうひんぱんに洗ったらかえって質が悪くなるんだぞ」

そう言ってみたことがある。志織の返事はそっけなかった。

「昔のシャンプーはそうだったのよ」

それ以来、彼は娘の朝シャンに文句を言わないことにした。どんなに馬鹿げて見えることにも、一応理屈はあるものだと悟ったのである。

洗面台にむかって歯を磨いた。歯みがきチューブにふたがしてないことに苛立ったが、騒ぎたてるのはよした。何にでも理屈はあるのだ。

奥歯の裏を磨いていると、吐き気がした。おえっ、と来る。しかし、彼は耐えた。くそっ、負けてなるものか、と彼は思った。奥歯の裏もきれいにしておかなければならんではないか。そこがざらざらなのは気持ちの悪いことだ。なんとしても磨かねばならない。吐き気に負けるわけにはいかない。

彼には、そういうところに、勝つだの負けるだのという言葉を当てはめる癖があった。親指にできたかなり大きなささむけを、痛いのを我慢してブチッとちぎり取った時、勝った、と叫んだ男である。だから必死で奥歯の裏を磨いた。そうしたら、本当にゲッと来て、酸っぱいのが喉元まで上がってきた。

うわ、と叫んで、洗面台に両手をついて肩でそっと息をした。酸っぱいものはかろうじて下がっていった。彼は両眼に涙をためた。そして、もう少しで負けるところだった、と思った。

歯みがきと洗面と、念入りな髭剃りのあと、柏木誠治はダイニング・ルームへ行った。

と言ってもそれは、リビング・ルームの一角のことであるが。

ダイニング・テーブルに着いて、中学生の息子の昇（のぼる）がパジャマ姿で食事をしていた。新聞のテレビ欄を見ながらの食事だ。

彼は自分の椅子にすわりながら、

「新聞貸せ」

と命じた。昇は一瞬ムッとしたような顔になったが、無言でそれをさし出した。

新聞を見ながらトーストを食べる。インスタント・スープと、たらこの焼いたのがおかずであった。子供たちに物心ついた頃から、ごはんにみそ汁という彼の好みの朝食は失われているのだ。

テレビに天気予報が写し出され、それに注目する。傘の必要はなさそうだった。

昇は皿の上に顔を伏せるようにして目玉焼きを食べていた。フォークを使ってはいるが犬のような食べ方である。今さらみっともないと嘆くこともないが。

食べ方よりも、昇の皿の上の目玉焼きが、今はもう崩れてその痕跡は残っていないが玉子を四個も使ったものであることが彼には少し気にいらない。いくら食べ盛りだと言ってもものには限度というものがあるではないか。彼が子供の頃は、玉子一個の目玉焼きですら豪華なものだった。玉子二個製のものは〝めがね〟といって特別なご馳走だったものだ。

それなのに玉子四個。そして、一番栄養のある黄身のかなりの分量が皿にこびりついているではないか。なんという食べ方をするんだと小言を言いたくなるのをかろうじて抑えた。文句を言っても通じやしないのだから。

「昇」

と彼は言った。少しは親子の会話というものがなきゃいけないと思うのだ。

「うん」

「ワープロ使ってるか」

「使ってるよ」

「うまくなったのか」

「まあね」

彼はワープロやコンピューターには一生触れずに生きていきたいと思っていた男だ。だから息子が臆せずにそれを使いこなしてくれるということがなんとなく嬉しかった。

「あれは、とんでもない漢字の当て字をしてくるんだそうだな」

「漢字変換で？」

「よく知らないんだが」

「あんなのどうってことないよ。何度もキーを押してりゃいいんだもん」

意味が理解できないので彼は引きさがった。今日はまあ、会話が沢山あったほうだと

満足する。

紺のブレザーの制服に着替えた志織が、台所へ駆け込んだ。

「お母さん、弁当」

それをもらうと鞄に詰め、そそくさと出て行こうとする。柏木は思わず横から口を出した。

「志織。また朝ごはん食べないの」

「時間ないもん。遅刻しちゃいそう」

「朝シャンなんかしてるからだよ。朝ごはん食べないと体によくないんだよ」

「だって睡眠時間けずるほうが健康に悪いんだよ」

「だから朝シャンを」

「あれは乙女の身だしなみ。行ってきます」

志織はばたばたと玄関を飛び出して行った。正代が台所から出てきて言う。

「昇、まだパジャマ着てるの。早く着替えなさい。一番近いところへ通ってるあんたが一番遅刻するんだから」

「まだ早いよ」

「そんなこと言ってて、あんたは出がけにもたつくんだから」

そういうタイプの子だなあと彼は思い、それは多分正代に似たんだろうと考えた。私

需要全本请访问 www.ertongbook.com